

1. 夜久野末窯跡群の立地

末窯跡群は京都府福知山市夜久野町の高内・日置・末にまたがって所在する須恵器窯跡群である。現在、100基を超える窯が牧川の両岸で確認されており、その規模は北近畿最大級を誇る。当窯跡群は、東西に流れる牧川によって北岸地域と南岸地域に、さらに南岸地区は牧川に注ぐ末川付近を境に、南岸東地区・南岸西地区として、大きく3つの地区に分けることができる。さらに既往の研究において、各地区の窯跡は字名を冠した支群にまとめられており、以下ではそれらを踏襲しつつ、各地区の立地について概観する。

牧川北岸地区には、北方に広がる丘陵の谷筋を中心に窯が分布する。当地区の最も西に位置する鎌谷支群（KT）は、北方から伸びるいくつかの丘陵裾付近に窯が築かれている。当支群中央付近には高内鎌谷遺跡が存在する。鎌谷支群の東には関垣支群（SG）が位置し、谷筋のやや奥まった場所に窯が分布する。さらに東の日置支群（HK）には日置谷とよばれる谷筋に窯が築かれている。

牧川南岸西地区は、西からトウデン・大町田・高内親谷・末親谷・日ノ本北に支群が分けられる。最も西に位置するトウデン支群（TU）は、北西に伸びて開く谷筋に窯が分布する。同じ谷筋のさらに北西側には竹ノ内古墳群や千切塚古墳群が位置する。トウデン支群から1つ尾根をはさんで東に位置するのが大町田支群（OM）である。牧川に向かって北東に延びる小さな谷あいには窯が確認されている。その谷のさらに東側には北東に大きく開く谷があり、そこに位置するのが高内親谷支群（TO）である。大きな谷から派生する複数の谷筋上に多くの窯が築かれている。さらに東側には末親谷支群（SO）が存在する。北東方向に細長く伸びる谷筋に沿って数多くの窯が築かれている。その東側に近接する日ノ本北支群（HN）は、末川に向かって開く狭隘な谷筋上に位置する。広畑支群（HR）は末川が牧川に合流する地点に位置し、末川最下流域の両岸に窯が分布する。

牧川南岸東地区の日ノ本南支群（HS）は、日ノ本北支群に南接しており、末川にむかって伸びる谷筋に沿って窯が分布している。さらにその南東には畑ヶ谷支群（HT）があり、北方に開く谷筋上に窯が築かれている。さらに東側には接続した東西2つの小ぶりの谷の付近にナゲ支群（NG）が開いており、西側よりも東側の谷の方が窯が密に分布する。ナゲ支群のさらに南東には、山ノ口支群（YM）、タクワ支群（TW）が狭隘な谷の縁辺にそれぞれわずかに窯が確認されている。また、今回は十分な踏査がおこなえていないが、溝ノ口（MZ）という地区には、末川に向かって長く伸びる溝ノ口谷のやや奥地で須恵器が採集されているほか、末川北岸の鏡地区（KG）にも、南西に開く谷の開口部付近に1基の窯が確認されている。

（吉永健人）

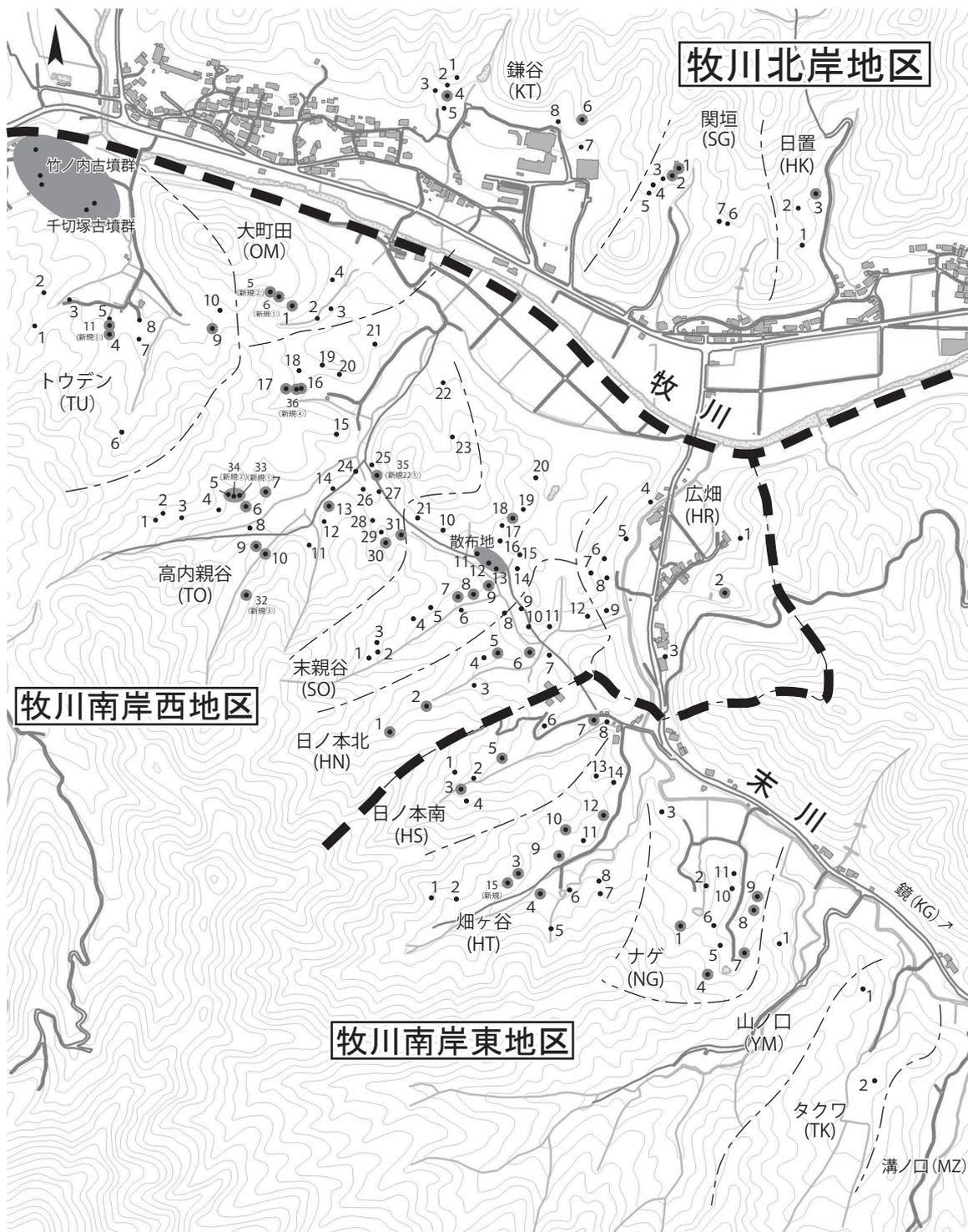


図1 夜久野末窯跡群の立地と窯の分布

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2